

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJF（国際文化フォーラム）の活動報告や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■中学生大連派遣事業

「好朋友特使」が大連の中学生と交流しました

TJFが中国遼寧省大連市教育局の要請を受け、2006年11月より大連教育学院と共同で編集制作に取り組んできた、中国初の中学校向け第二外国語教育用日本語教科書『好朋友ともだち（試行版）』全5巻が2009年秋に完成しました。この完成を記念して、同事業の助成団体の一つである（財）かめのり財団の委託を受け、3月に日本の中学生7名を「好朋友特使」（以下、特使）として大連に派遣しました。

5巻の教科書に掲載されているストーリー漫画の主人公が、父親の転勤に伴い大連に住むことになった横浜の中学生であること、大連を省内に抱える遼寧省が神奈川県と友好提携関係にあることから、神奈川県内の中学生を対象に募集しました。

当初、2009年10月中旬に実施する計画を立てていましたが、新型インフルエンザの流行もあって、大連側から延期してほしいとの要請を受けました。その後、大連側と協議を続け、2010年3月末に実施することができました。

本事業の目的は、大連市内で日本語を学ぶ中学生と交流したり、彼らと一緒に名所旧跡を見学したりすることを通じて、中国の人びとや中国の教育、社会、文化への理解を深めてもらうこと、さらには同世代の若者と日本語や英語を使ってコミュニケーションすることを通じて、外国語を学ぶことの意義、コミュニケーションの重要性について認識してもらうことでした。そのために、以下の3項目を事業に盛り込みました。

- ① 日本語教育実施校の訪問および生徒との交流
- ② 大連市内および郊外の名所旧跡見学
- ③ 伝統文化および現代の人びとの生活の体験（ホームビジット）

大連市内観光

[1日め]

大連を含む中国の東北地区は、日本と歴史的・経済的な関係が深いことから、7名の特使全員に、派遣前に大連と日本との関係を調べてもら



存建築物や日本風の建築物、林立する高層ビル群などを通じて、歴史と発展が共存する大連市を体感することができました。

訪問場所

歴史を感じる：大連京劇院（旧東本願寺）、中山広場（旧大広場）
発展を感じる：労働公園から眺める大連市街（高層ビル群）、星海広場（アジア最大の広場）

水族館見学

[2日め]

特使7名はペアを組むことになった大連市第31中学の生徒7名と対面し、一緒に大連市内にある水族館を見学しました。最初はお互いに緊張



していましたが、昼食時に男女14名が輪になりゲームを始めた途端に緊張がほぐれ、名実共に「好朋友（ともだち）」になりました。第31中学の生徒のひとりも事後の感想文のなかで、「あの昼食を境に緊張が解けた。国境はないと知った」と述べています。

ホームビジット

[2日め]

現地の生活が体験できることから、出発前から特使全員が楽しみにしていたプログラムでした。第31中学の取り計らいで、各家庭で餃子の手作



り体験ができるように準備をしてくれており、7名全員が大人も含めた共同作業を通じて、中国人の優しさ、温かさを感じることができた、と述べていました。

大連市第31中学訪問

[3日め]

学校見学、体操・ダンス体験、日本語と美術の授業参加、英語や地理などの授業見学、学食体験など、特使7名にとってはすべてが初めての体験で驚くことばかりだったが、そのなかで最も印象に残っているのは、第31中学の

生徒たちの勤勉さだ、と全員が口を揃えて答えていました。第31中学の生徒たちはみな積極的で、生徒と教師双方向の授業が成立しており、自分たちの中学校ではあまり見られない光景に驚くと同時に、彼らの姿勢を学びたいと述べていました。



日中中学生交流会

[4日め]

交流会では、大連の中学生のほとんどが個人芸を披露しました。特使7名は、彼らの一人で舞台上立つ度胸に驚くと同時に、今度訪中する際



には何か個人芸を身につけてこなければ、と語っていました。交流会の最後に、主催者がプレゼントしたおそろいのTシャツに、サインやメッセージなどを書きあいました。3時間という短い交流でしたが、お互いに「好朋友」をつくるこ

とができました。

特使7名は帰国後、中国語が開設されている高校へ進学したり、中国語教室へ通ったりしています。来年高校受験を控えている生徒からは、中国語が開設されている高校への進学をめざしているとの報告も受けています。また、保護者からは「親子で一緒に日中の歴史を学ぶことができた。中学生の時期に貴重な経験をさせてもらった」、学校長や担当教員からは「生徒の成長を感じることができた。今後も何らかの形で協力させてほしい」との感想が寄せられています。本事業は、特使本人が成長したばかりではなく、大人たちも彼らとともに視野を広げることができた事業となりました。TJFは、今後も日中の中学生の交流が継続するようサポートしていく予定です。

(森本雄心)

派遣期間：	2010年3月27日(土)～3月31日(水)
主催：	財団法人かめのり財団
実施：	TJF
日本側協力機関：	神奈川県教育委員会、神奈川県公立中学校長会、横浜市教育委員会、横浜市立中学校長会、川崎市教育委員会、川崎市立中学校長会、財団法人神奈川県私立中学高等学校協会
中国側協力機関：	大連市教育局、大連教育学院、大連市第31中学、大連市第37中学、その他大連市内の日本語教育実施中学校
輸送協力：	ANA

参加した生徒の感想

大連で暮らす人びとは、中国人の日本人には冷たいというイメージとはほど遠く、みんな親切で感動しました。一番の思い出は、たくさんの好朋友ができたことです。この好朋友には大連でできた友だちだけでなく、日本の好朋友特使のメンバーも含まれています。

銀色の鎧 (中2女子)

私が中国と日本の違いがはっきりしていると感じたのは、学校だった。学力のレベルが違いすぎた。当たり前英語が話せるのだ。授業時間は50分と、そこは日本と変わらないが、集中力の凄さに大圧倒された。でも中国の同年代の人たちはとても優しく、フレンドリーで、笑顔がとてもお似合いだった。

アンコロ (中3女子)

正直、大連へ行く前はあまり中国に対してよいイメージがなかったけれど、5日間滞在して、それまでのイメージがだんだん変わっていきました。確かにまだ格差だったり環境のこざたりさまざまな問題はあるけれど、それ以上に食事や中国独特の文化、そして人びとの優しさなどを身をもって体験することができました。

るっぴー (中2女子)

私は“違い”を見つけたとき、慣れてよく知っている物の良い面ばかり考えているのだとわかりました。そして、今までとの“違い”に対して悪い面を見たイメージを作ってしまったのだと思います。私はこれからは見つけた“違い”について、その理由を聞きたいと思います。そのために、私は思った

ことを自分と違う言語をもつ人に伝えられる語学を身につけたいです。そして、たくさんの人と理解し合い友だちになりたい。

ひーなー (中3女子)

面接で「もし、あなたが中国に対して日本人が行ったことに対してどう思うか、と聞かれたら、なんと答えるか」と聞かれた。そのときは、「悪かったと思うと謝りたい。そして、これからの日中関係は私たちが作り上げていこう、と伝える」と答えた。でも、今は知識が限られていて、狭いものであったとわかった。だから、もっと私には多くの情報が必要だと思う。もっと時間をかけて考えていかないと、と思った。

あいら (中3女子)

人は建物ではないので自分がどう思っても伝わらない。接しなければ伝わらない。僕たちはその部分に興味をもち集まった……はずなのに僕はできなかった。「異文化理解」の上には「相互理解」が乗っている。それができて初めてプロジェクトは完成したといえる。しかし僕自身は何も与えていない。与えてもらってばかりでは今回中国に来た意味がない。そして僕は決めた。この不足分は未来で返すと。

アルマ (中3男子)

この5日にわたる好朋友特使としての活動では、多くの人とふれあい、交流し、仲を深めていくことができたと思います。以後の自分の目標は、まず、もっと多くの人と交流すること、そして、そのような考えをくれた中国についてもっと学ぶことです。

NARU (中2男子)

■日本の中国語教育関連事業

高校生を対象に土曜中国語講座を開催しました

中国語の講座を開設している高校は、全国の高校のなかでわずか12.3%にすぎず、学校で中国語を学ぶ機会がない高校生がたくさんいます。



©桜美林大学孔子学院

TJFは昨年度、そうした高校生にも中国語にふれる機会を提供したいと考え、土曜中国語講座「学んでみよう中国語！」を企画しました。この講座は、神奈川県私立中学高等学校協会の主催により実現しました。私立高校6校から25名の参加者があり、そのうち6名が、TJFが夏到北京で実施した第3回漢語橋：日本の高校生サマーキャンプに参加し、学んだ中国語を使ってさまざまな体験をしました。

今年度は、神奈川県内の私立の高校生に限らず、公立高校の生徒も含めて広く募集したいと考え、TJFと中国語教師研修を共催したことのある、桜美林大学孔子学院に企画を持ちかけ、同学院の主催で開講できることになりました。募集に際しては、神奈川県私立中学高等学校協会の協力を得ました。

初めての授業が行われた5月8日(土)、桜美林大学PFCに集まった生徒は男子生徒11名、女子生徒2名の計13名。講座を担当する**龚振**(こん・しん)先生が一人ひとりに受講の動機をたずねると、歴史や漢文が好きで興味をもった、中国語を勉強している母親から勧められた、将来を考えると中国語を学んだほうがいい、中国人の母親をもつ友だちと一緒に中国に行きたい、中国に行ってもっと中国語が話せるようになりたいと思ったなど、さまざまな答えが返ってきました。

全7回(1回2時間)の講座は、自分の名前を中国語で言うことから始まり、日常のあいさつや自己紹介など、ごく簡単な会話ができる力を身につけてもらうことを目標としました。クラス全体の学習熟度は回を重ねるごとに高まり、今回も受講者のうち6名が第4回漢語橋：日本の高校生サマーキャンプに参加することになりました。

(水口景子)

■日本の韓国語・中国語教育関連事業

研修講師およびコーディネーターのワークショップを開催

TJFは、8月5日(木)から9日(月)まで桜美林大学において2010年高等学校韓国語中国語教師研修を実施します。研修に先立ち、研修の後半に組み込んでいる授業づくりのグループワークで、講師とグループコーディネーターが作業をリードできるように、同研修で主任講師を務める米国カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授を招いて5月15日(土)に東京でワークショップを開催しました。

今回のワークショップに参加した28名は、韓国語・中国語の「学習のめやす」がめざす言語教育とは何かを再確認し、その目標を達成するための学習活動とはどのようなものなのかを考えました。特に今夏の研修のテーマとなる、「学習シナリオ(一連の学習活動のことを指す)」という概念や、カリキュラムのゴールをまず設定したうえで、ゴールからさかのぼってカリキュラムをデザインする「バックワードデザイン」という概念を参加者全員で共有しました。またゴールと表裏一体の評価については、学習後に行う総括的評価と、学習過程で行う形成的評価をどのように行い、どのように学習者にフィードバックするかを検討しました。

参加者からは、カリキュラムのバックワードデザインや学習シナリオに関する質問が相次ぎ、興味深い概念であるので、もっと詳しい説明を聞きたいという声が多く寄せられました。夏の研修では、用語の定義や説明をより丁寧にする必要があることや、用語集や資料を事前に作成し研修生に配付する必要があることなど、研修に向けて参考となる意見を多くいただくことができました。

(中野敦)

■中国黒龍江省教育代表団招聘事業

第二外国語としての日本語教育推進プロジェクトがスタート

TJFは、遼寧省大連市の中学校における第二外国語としての日本語教育(以下、二外日本語)推進プロジェクトの成果を踏まえ(本誌第85号参照)、大連以外の地域、特に東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)に、二外日本語を推進していくことになりました。2010年度内に、東北各省の教育行政関係者および二外日本語導入モデル校の校長等の日本招聘、二外日本語教師ワークショップの開催、各省のモデル校を対象に日本語教育専門家による巡回指導などを計画しています。

吉林省は10校程度、黒龍江省は2校、遼寧省（大連市以外）は10校程度のモデル校がすでに選定されています。日本招聘の第一弾として、黒龍江省教育庁副庁長を団長とする、モデル校2校の責任者を含む黒龍江省教育代表団一行9名を5月に、二外日本語導入モデル校の校長4名を含む遼寧省教育代表団一行5名を6月に、それぞれ5泊6日の日程で招聘し、日本理解を深めてもらいました。

日本の教育機関を訪問し交流

二つの代表団は滞在中に、教育行政機関や神奈川県内の中学校と高校を訪問しました。学校では、中国語の授業を見学したほか、中国語を学ぶ生徒や中国籍の生徒などと交流しました。

黒龍江省の代表団は、単位制システムの良さ、教師と生徒による双方向の授業、生徒の質問に答える

ことを教師の研修と考える姿勢、オープンスペース的な教職員室などに感銘を受けたようです。一方、遼寧省の代表団は、教師の評価システムについての意見交換、日本側から出された中国の教育事情に関する質問などが印象に残ったようで、両代表団とも有意義な交流の時間を過ごしました。

そのほか、東京都内や観光先の箱根で、来日してから覚えた日本語のあいさつを使ってコミュニケーションを図るなど、ことばを学んで交流する喜びを体感しました。

持続可能な日本語教育を求めて

中国の言語教育は、近年英語に重きをおきすぎ、英語以外の言語は軽視される傾向にありました。しかし、最近母語や自文化重視の揺り戻しがあり、さらに英語だけでなく複数の外国語を子どもに学ばせたいという保護者が増えているこ



（上）黒龍江省の代表団。神奈川県教育委員会を訪問し、意見交換した。（下）遼寧省の代表団は、高校茶道部でお茶を体験した。

となど、二外日本語を導入するのに好条件がそろったと黒龍江省の代表団は語っていました。一方、遼寧省の校長たちは、英語を苦手とする生徒に他の外国語の選択肢を与えたい、学校の特色として日本語教育を実施したいと考えていることもわかりました。

秋以降、教育行政関係者とモデル校の校長から成る吉林省教育代表団を招聘する予定です。

（長江春子）

■理事会・評議員会

2010年度第1回通常理事会・評議員会報告

去る5月28日（金）午前に理事会が開催され、2009年度事業報告および決算報告の承認の件、2010年度事業計画および収支予算書の変更案、新定款および同附属規定の修正案、公益財団法人への移行認定申請に関わる件について審議し、いずれも承認されました。引き続き同日午後には評議員会が開催され、理事会承認案件および公益認定後の最初の役員について承認されました。

2009年度は①中国大連市の小中高校における日本語教育支援プロジェクト、②日本の高校中国語・韓国語教育のための「学習のめやす」作成プロジェクト、③日本関連情報の海外への発信、④中高校生を対象とする中国語および韓国語の学習奨励・交流事業などを重点事業として推進し、当初の目標をほぼ達成することができました。

本年度は、こうした事業により注力するとともに、公益財団法人への移行認定取得に取り組んでいきたいと考えております。今後ともご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（岡崎憲行）

実施事業一覧（2010年4月・5月・6月）

- 『国際文化フォーラム通信』第86号発行（4月）
- 『小溪』No.44発行（4月）
- 高等学校韓国語中国語教師研修講師およびコーディネーター対象ワークショップ開催（5月／東京）
- 黒龍江省教育代表団招聘（5月／東京・神奈川）
- 「高校生のための中国語講座」協力（5～6月／神奈川）
- 遼寧省教育代表団招聘（6月／東京・神奈川）
- 2010年高等学校中国語教育全国大会後援（6月／富山）
- 『Takarabako』no.24発行（6月）
- 『ひだまり』第43号発行（6月）

お知らせ

二外日本語担当教師向けの研修を開催します

TJFでは、2006年度より大連教育学院と共同で、中国で初めての中学校向け第二外国語教育用日本語教科書『好朋友 ともだち(試行版)』全5巻を編集制作し、大連市内の日本語教師を対象に研修会等を実施してきました。

今年度からは、大連での成果を踏まえ、東北三省(遼寧省、吉林省、黒龍江省)の現在日本語教育を実施している中高校、およびかつて実施していた中高校を中心に二外としての日本語講座の開設を支援することにしました。その一環として、『好朋友』を使って二外の日本語担当教師のための研修(『好朋友』ワークショップ)を実施します。

- 日時 2010年8月22日(日)～23日(月)
- 場所 中国遼寧省瀋陽市
- 対象 東北三省の中高校日本語(第二外国語)担当教師 30～40名
- 主催 遼寧省基礎教育教学研究研修センター、TJF

全国の教育行政関係者・校長の中国派遣事業への参加者を募集します

TJFでは、中国語教育に積極的に取り組んでいる地域の教育行政関係者、中国語教育実施校および中国理解教育や中国との交流に関心をもつ学校の責任者に中国を訪問してもらい、中国の教育現場を視察するとともに、中国の教育行政関係者や学校長と交流するプログラムを2008年度より実施しています。2008、2009年度にはそれぞれ、神奈川県と東京都の私学協会の協力を得て、私立の中高校の理事長・校長を含め、14名を中国に派遣しました。

2010年度は、文部科学省の協力を得て、全国の公私立の高等学校と都道府県の教育行政機関などを対象に参加者を公募します。

- 派遣時期 2010年11月22日(月)～26日(金) 4泊5日
- 派遣先 北京市
- 参加費用 57,000円*+燃油サーチャージ
*往復国際運賃、海外旅行傷害保険、事務局運営費を含む。
なお、北京滞在中の費用はすべて中国政府負担
- 募集人数 40名
- 主催 中国国家漢弁
- 実施 TJF
- 後援(申請中) 在中国日本大使館、駐日本中国大使館教育処
- 協力 文部科学省

募集要項等詳細は、TJFウェブサイトのトップページ「お知らせ」コーナーでご確認ください。www.tjf.or.jp

「TJF Photo Data Bank」、flickrへ移行!

「TJF Photo Data Bank」は7月15日をもって運営を終了しました。中国編に掲載していた写真を引き続き中国語や中国理解の授業に活用していただくために、「TJF Photo Data Bank China」をオンライン写真検索サイト flickr にオープンしました。引き続きご利用ください。

☞ www.tjf.or.jp/notice/pdbc/index.html

日本編については、今後「TJF Photo Data Bank Japan」(仮称)を flickr にオープンする予定です。下記 URL では、日本関連の写真を検索できるサイトを紹介していますので、ご利用ください。

☞ www.tjf.or.jp/notice/pdbj/index.html

編集後記

TJFは海外の小中高校における日本語教育を支援してきたが、小中学校となれば当然各国の義務教育の範疇ともなり、相手国・地域の教育基準に沿って日本語教育を考えなければならない。当該国・地域の教育行政機関あるいは関係者が、TJFと異なる考え方をもっている場合には、TJFとして難しい調整を迫られることになる。

今号で取り上げた日本語教材『好朋友 ともだち(試行版)』(全5巻)の編集・制作プロジェクトについては、大連市教育局と教育理念および言語教育に対する使命感を共有できたことは有難いことだった。互いのことばと文化を学ぶことを通じて日中の中学生をつなごう、というTJFの提唱に対して教育局も賛同し、教材の教育理念として「人間関係の温暖化」と「多文化共生」を掲げた。その会合は忘れられないものとなった。身を削るような仕事ではあったが、やりがいのあるプロジェクトだった。

日本語教育が中国の子どもたちのグローバル教育に貢献し、日中の子どもたちをつなごうことに役立つのであれば、教材制作の意義も一段と深まる。漫画を採用するという提案に異論なく教育局からOKが出たことも嬉しかった。漫画の原案、漫画家、制作者の選定も日本側に任せてくれた。漫画「大連物語」は、中国で出版された、最初の日本語による日本の漫画である。

今号では、特にこの理念に焦点をあて、理念を飾り物として終わらせずに、教材の細部にまで浸透させる努力をしたことを紹介し、外国語教育の素晴らしさを伝えたいと思った。多くの教科のなかでも、目標や内容、方法さえ適切

に設定されれば、外国語は21世紀に必要とされる資質を育てることのできる最も有力な教科になると思う。OECDが提唱するキー・コンピテンシーも、can-do statementsの設定過程で取り込んだ。未知なる言語を楽しく学び、学んだことばや文化理解の視点を土台に、実際に母語話者と交流するところまでを外国語教育の必須領域として含めることができれば、教科としての可能性は広がる。もちろん文法中心の受験のための外国語教育であれば望めない話である。

人と人をつなぐことば、自己を表現し相手を理解することばの力を改めて認識し、時空軸における自分の立ち位置を把握する力を身につけることのできる外国語学習は、自ずと世界のさまざまな人とつきあっていける力を育ててくれる。

大連市の小中高校における日本語教育は今や危機的状況を脱し、現在、推定1万2,000人以上の小中高校生が日本語を学んでいる。日本の学校との交流も増え始めている。また今年の3月には、横浜の中学生7名を特使として派遣し、大連の中学生と交流する特別事業も実施した。

「外国語を学ぶということは、好朋友(ともだち)が星から落ちてくるようなものだ」、ということを象徴させるべく、漫画の物語は、星が降ってきたという伝説のある大連の海辺に、主人公の美佳が流れ星に乗って落ちてくる場所から始まる(現実には横浜からくるのだが)。ドラマチックに日本語が学べた、という中学生のことばが嬉しかった。多くの子どもたちに、星が好朋友を運んでくれたらと思いつきながら教科書を作った。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム THE JAPAN FORUM



国際文化フォーラム通信 87号
2010年7月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
校閲・校正 石井雅男・松木万里子

財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14
音羽 YKビル3階
TEL 03-5981-5226 FAX 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>